

令和3年(2021年)7月1日

第66号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀文化

黒船と日本人

江戸時代の日本は、活気あふれる生活を営む中で豊かな文化を育んできました。泰平の眠りをさました黒船は、極東の小さな島国に住む「日本人」をどのようにみていたのか……。



「ハイネ画」ペリー久里浜上陸の図

浦賀(針)のように航海中に暴風雨にさらされ、難破してヨーロッパの人が九州沿岸に漂着するケースがあります。江戸時代には朝鮮・清国・オランダの三国に限り門戸を開いていたものの、諸外国からの交易を求めため、の来航は絶えることがありませんでした。

「鎖国」政策の扉を開いたペリー一行による浦賀への来航は、当時の日本人を驚嘆させる大きな出来事でした。見たこともない大きな軍艦が四隻、威嚇のための大砲を空に向けて放つ姿に、浦賀の海岸を警備していた人たちは、どれほど不安な気持ちになったことでしょう。

◇ ◇ ◇

時は嘉永六年(一八五三年)

七月八日(旧暦六月三日)の夕刻のこと、船体を黒く塗った四隻の巨大な船が浦賀沖に現れたのです。夕暮れの海岸を照らしていた松明もすべての火が落とされた後のことでした。その一週間ほど後の七月十四日(旧暦六月九日)、久里浜の海岸にペリー一行が上陸してフィルモア大統領からの国書の受け渡しが行

われました。この歴史的なできごとが日米友好を記念する『ペリー祭』として今につながっているのです。

ペリー提督は日本との交渉を通じて日本人の行動を観察し、将来、日本はアメリカと肩を並べるような先進工業国になることを予測していたといえます。

◇ ◇ ◇

江戸時代中期から後期にかけて、欧米の先進国であるアメリカ、フランス、イギリスなどの諸国は、豊富な資源を求めて、アジア大陸沿岸のインドを初め東南アジアの国々を次々と植民地にしていきました。しかし、タイ王国と日本は植民地支配を免れています。その理由の一つに、日本人の「識字率」(文字を讀める国民の比率)の高さが指摘されています。

江戸時代の日本には寺子屋が津々浦々に開かれ、一般の町民を相手に子供向けの読み書き算盤を主体とした教育が盛んに行われていました。黒船が来航した当時の日本では、寺子屋への就学率が七十〜八十六%にも達しており、イギリス(一八三七年、20〜25%)やフランス(一七九三年、1.%)などの諸外国に比べて識字率が高かったことから、学校が制度化される以前から子女の教育が盛んだった

ことが窺えます。私たちが何気なく使っている言葉にもこうした教育の影響が表れています。例えば、「良薬は口に苦し」という言葉は、二千年も前に編纂された『孔子家語』の中の『良薬は口に苦くして病に利あり。忠言は耳に逆らいて行いに利あり』という孔子の説話から成った故事ですが、江戸時代の人たちもこうした言葉を日常的に口ずさんでいたのかと想像すると、当時の教育の高さにハッとさせられます。

文字を讀み書きできるということは、つまり本や新聞が読めるということです。本や新聞が読めれば、知識が豊かになり、生き方や思考能力を身につけることができます。黒船が来航したころには「瓦版」という、現代の新聞に相当するマスメディアがあり、人々は情報源として買い求めたといえます。寺子屋などの教育機関の果たした役割の大きさが改めて実感されます。長引くコロナ禍の中、私たちは学ぶことの大切さを、今一度噛みしめてみたいものです。

(芳賀久雄)

★参考資料

- ・続・横須賀人物往來
- ・日本全史(ジャパン・クロニクル) 講談社
- ・ウイキペディア



歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その十六

郷土史家 山本 詔一



●大矢弥市と浦賀●

嘉永四年（一八五一年）は、前年に西浦賀へ出店したばかりの新参者の米穀問屋の噂で持ちきりであった。この新参者は、高座郡栗原村（現・座間市）に住む大矢弥市という人物で、天保二年（一八三二年）に、画家・蘭学者として名高い渡辺崋山が著した『游相日記』に「十八万両の相模一の豪のもの」と記されるほどの豪農であった。

その弥市がどうして浦賀に目を付けたのであろうか。それは当時の浦賀が流通の要であり、江戸湾防衛の最前線であったこと。つまり、異国との接点の場所であり、時代の先駆けの地であったことが大きな要因であると考えられる。弥市は、浦賀進出の手始めに、嘉永三年七月、親戚筋にあたる松崎屋与兵衛を通じて、「異国船渡来でお手当てが大変な」と存じます」と御備場のお米約一〇〇〇俵分の献金を申し出た。同年一〇月には、蛇島町（現・西浦賀一丁目）で米穀問屋「丸屋」を開業すると、再び松屋を通して、「先の御備場御用米一〇〇〇俵分と先年玉葉製造所の火事で焼失した「蒼隼丸」の代替船新調の入用金」の上納を御国恩に報いるためとして願ひ出ている。この願ひは、老中・阿部伊勢守正弘によって、翌年の正月に許可されている。

そして五月に、蒼隼丸型の再建費用二六六両余と御備場の米蔵の建設費用二二二両余が上納された。六月には米蔵が出来上がり、さらに弥市は、この米蔵に入れる米一五〇〇俵も納めている。前号に示したように、この年は米が不作の年であり、東西の浦賀でさえ困窮者に施米をしているほどであったので、この代金とてばかにならない金額であったとおもわれる。米を積み入れる作業に、東西浦賀から六名ずつが駆り出されている。

また、嘉永五年正月、西浦賀の枝郷（会津藩が江戸湾警備に付いた時に西浦賀村のうち吉井・久比里・長瀬のエリアは西浦賀枝郷として会津藩領となった）や預所（浦賀奉行所が年貢の徴収や民政に関わることを預かり管理している村）の村役人が連名で、「御備場が増えており、奉行所や番所の業務にも支障が出るようです」といけませんので、どこの御備場で出向けと言われれば村人を動員できる態勢を整えておりますから、

いつでもお使いください。これが御国恩に報いることと思っております」という願書が提出された。

さらに、東西の水揚問屋が嘉永五年から「一年に永二〇〇貫（金二〇〇両）の一〇年分、永二〇〇貫（金二〇〇両）を非常警備に役立ててもらうための冥加金として前納させてもらいます」という願書が提出された。またこの願書には、一〇年が過ぎた後は、一年に永二〇〇貫ずつ上納することも記されている。

枝郷や預所、さらには東西浦賀の商人の動きには、丸屋（大矢弥市）の一連の動向が影響しているとおもわれる。さらにこれらの行動が翌年に起きるペリー来航を予測していたかのような状況づくりをしていることが興味深い。

*御国恩：幕府による無事泰平の世に感謝し報謝すること。

俳句の散歩道



夢に逢う母は黄泉人合歓の花

新田 和江

冴返るむかし三味線響く路地

鈴木 ひろ

笑話一題

家中暮らしの時間が多くなるなかで、気軽にできて気分転換になる散歩はいいですね。

最近、歩数も消費カロリーもわかって目標を達成するとご褒美も貰えるゲーム感覚のアプリを教えてもらいました。モチベーションを下げさせずに継続的にできるようなっているのだからかなりの優れものです。

久里浜や馬堀までの散歩がお決まりコースとなると今度は、経路を変えて攻めて行くのが楽しみになります。なんとと言っても散歩の醍醐味は、寄り道コースを増やすことです。

舟倉町で脇道に入って生産者緑地の畑の前で旬の野菜が成育していくのを眺め、怒田城跡の入口を見つけて登ってみるのも散歩ならではの楽しみです。体力十分のときは、愛宕山の長い階段をゆつくりと登り、乱れる呼吸を整えながら眼下に広がる海を眺めると清々しい気分になれます。船番所跡の前で釣りする人たちの釣果を覗いてみたり、「アカモクあります」の案内に季節を感じたり、ぼんぼん船に乗るのも一興。穏やかな時間と一緒に過ごせるのが、この町の魅力のひとつかもしれません。

おすすめの寄り道コースがあります。ありましたら分館にお寄りの際に是非、教えてください。

★ ★ ★

さて、当館では「浦賀道をゆく」を秋以降に開催予定です。歴史もすべて体も動かして一挙両得なこの講座、どうぞ楽しみにしてください。



(なな丸)

